

復興支援からみた南スーダンと東北

共通の地平は可能か？

栗本英世

2011年3月に東北地方が大地震と津波の被害に見舞われたとき、南スーダンを含む世界各国の友人や知人から「大丈夫か」という連絡を受けた。いろんな人たちが自分のことを気にかけてくれているという事実は嬉しいものであり、この講演のテーマである「共通の地平」の基盤になるものであると思う。しかし、そうは言っても、南スーダンと東北という、地理的にも遠く離れ、歴史的背景や社会と文化もおおきく異なる二つの地域の人びとのあいだに、共通の地平を創り出すことはそれほど容易ではない。

突然家と財産、家族のすべてを失ってしまう、数千人から数万人といった数の人びとの生命が失われる、先祖代々住みなれた故郷が破壊されてしまうといった、非日常的で特異な経験をした人たちは、どれだけ時間的・空間的に離れていても同様の経験をした人たちに対して共感を抱くことはあるだろう。今日、この場で考えたいことは、とてつもない苦難を経験した南スーダンと東北の人びとのあいだに、どのような「共通の地平」があるのかという問題である。そして、もうひとつ考えてみたいのは、南スーダン人の苦難の経験に寄り添ってきた私という一人の人間が、東北に対してどのような「共通の地平」を見い出すことができるのかという問題である。私は日本人だが、東北よりむしろ南スーダンのほうが馴染み深い。東北の被災に関する知識は新聞やテレビで報道されるものに限られている。



講演する栗本英世氏

私は、人類学者として30年以上、南スーダンの人たちとかがわってきた。そのうち22年間、スーダンは内戦状態にあった。内戦は2005年によく終結したが、約250万人が亡くなり、数百万人が難民と国内避難民になったと言われている。スーダン内戦は、アフリカだけでなく世界の現代史のなかでも突出した惨禍であった。内戦が終結した2005年以降も、また南スーダンがスーダンから分離独立した2011年以降も、平和が達成されたわけではなく、各地で武力紛争が継続し、犠牲者の数は増え続けている。こうした状況のなかで、私の友人知人の多数も亡くなった。すべての財産や生活基盤を失った人の数はもっと多い。

内戦中も、2005年に内戦が終結したあとも、私は、個々の人間にとって戦争の経験とはいったいなにだったのかを理解しよう、わかろうと努力してきた。この過程で認識したのは、本当に苛酷な経験を、理解したとかわかったとか軽々しく言うべきではないということだ。「筆舌に尽くしがたい経験」という言葉がある。尋常でない苦難の経験は、第一に本人が言葉では表現できない。あるいは、表現できるようになるまで、長い年月を必要とす

る。私にできることは、筆舌に尽くしがたい経験をした人たちに、共感したいという姿勢をもって寄り添い続けることだった。理解することはできないが、感じることはできるかもしれない。場所や空間、そして人間どうしのつながりを共有することはできる。そして、寄り添い続けることが、苦難の状況に置かれた人たちにとって喜びや楽しみの瞬間であることがある。これも「共通の地平」のあり方のひとつである。

東日本大震災とスーダン内戦のあいだには、おおきな違いがあるように思える。第一に、震災は天災だが、内戦は人災である。第二に地震と津波は1、2時間のあいだに発生したが、内戦は22年間にわたって継続した。つまり、短期間と長期間という違いがある。第三に、行政システムの確立の度合いの相違がある。東日本大震災の被災地では、当初は行政が麻痺したりおおきな混乱があったりしたが、国と県、市町村のレベルの政府がしっかりと存在しているのに対して、南スーダンはほとんど無政府にちかい状況に置かれており、2005年の内戦終結後も政府は人びとに十分なサービスを提供できていない、といった明確な対比がある。しかし、こうした違いも、ちょっと考えるとあいまいであることがわかる。東北の立場からすると、震災の被害は100パーセント天災であるといえるわけではなく、そこには人災の要素があるだろう。地震と津波は一瞬の出来事であったが、その影響は数年から数十年に及ぶから、中長期的な観点が必要である。また、各レベルの政府は、人びとが考えていた、あるいは期待していたほどは頼りにはならないといった状況があるのではないだろうか。つまり、南スーダンと東北のあいだには、一見するとおおきな違いがあるが、少し掘り下げると共通した側面があるということだ。

南スーダンの人たちと付き合い続けて強く感じるのは、彼／彼女たちが備えている、困難な状況を生きぬく力の強さである。これは、私たちの想像を越えている。この生きぬく力を支えているのは、同胞や同輩たちとのつながりだ。この力は、内戦でいったん破壊された、家族と親族、そして何世代にもわたって居住を共にしてきた人たちから構成される共同体(ムラ)を、再構築しようとする粘り強い指向と結びついている。見過ごしては

ならないのは、強靱な共同体指向がある一方で、長い内戦のあいだに共同体から外に出て行き、平和になっても帰ってはこない多数の人びとが存在することである。こうした南スーダンの特性は、程度や質のちがいはあっても、東北にも共通するものではないかと考える。

南スーダンでも、戦後復興の事業は、ゆっくりとではあるが進展している。しかし、インフラの整備と新たな政府機構の確立に集中し、いったん壊された人間どうしの社会的つながりの再構築と、個々の人間が居住している場で生業を営んで生きていけるようにすること、つまり生存基盤の整備は、なおざりにされている。また、復興に関する政策の立案と決定は、人びとがあずかり知らぬ場所でおこなわれている。こうした問題点も、東北と共通しているのではないだろうか。

インフラの復興は必須であることはたしかだ。道路、通信施設、学校、病院、様々な公共施設は人びとが生活していくうえで必要である。しかし、それとあわせて、崩壊した人間どうしのつながりを新たに構築し、それぞれの地域で人びとが人間として生きていけるようにすることが、復興の柱となるべきである。そして、このなおざりにされている復興の重要な側面がいかにおこなわれるべきかについての計画立案と決定は、人びと自身によっておこなわれなければならない。これは、未曾有の苦難を経験した南スーダンと東北のそれぞれにおける復興から私たちが学ぶことができる共通の教訓である。

私は、南スーダンの視点から東北を見ている。同様に、被災した東北の人たちも、自らの視点から世界の他の地域の人びとを見舞った天災や人災を捉えることが可能だろう。ここには、特異で特殊な経験であるがゆえに、他者を理解する道筋が開かれるという逆説がある。「共通の地平」を創り出す出発点は、こうした自分の経験にもとづく他者へのまなざしであろう。そして共通の地平の創出は、復興とはなにか、なにがいかに復興されるべきなのか、さらに復興に対する支援はいかにあるべきかといった、実践的かつ理論的な問題のより深い理解へとつながるものと考えられる。

(くりもと・えいせい/大阪大学大学院人間科学研究科)